

『今月の天候と農作業』

通巻第5574号

12月号

平成26年 11月 27日発行

宮 崎 県

宮崎地方気象台



【九州南部1か月予報】

＜特に注意を要する事項＞

期間の前半は気温の変動が大きいです。1週目前半は高く、1週目後半から2週目前半にかけては低い見込みです。

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

【確率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	30	30	40
降水量	九州南部	20	40	40
日照時間	九州南部	40	40	20

【概要】

天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。

向こう1か月の降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。日照時間は、平年並または少ない確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、平年並の確率50%です。2週目は、平年並または低い確率ともに40%です。3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

＜1週目の予報＞ 11月29日(土)～12月5日(金)

期間のはじめは、気圧の谷や湿った気流の影響で、曇りや雨となるでしょう。その後は冬型の気圧配置となり、東シナ海側では雲が広がりますが、太平洋側では晴れる見込みです。

※明日から1週間の、日別の天気や気温などは、週間天気予報 (<http://www.jma.go.jp/jp/week/>) を参照してください。

＜2週目の予報＞ 12月6日(土)～12月12日(金)

天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

＜3週目から4週目の予報＞ 12月13日(土)～12月26日(金)

低気圧の影響を受けやすく、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。

普通作物

◆ 水稲

1 土づくり

土作りは、丈夫で高品質な米生産の基本です。

堆肥は前作物の条件でも異なりますが、牛糞たい肥の場合は1 t程度投入します。ケイ酸質資材は稲の茎葉を硬くし、倒伏やいもち病にも強くなる効果がありますので、地区基準等をもとに施用します。

ロータリー耕だけでは作土が浅くなりがちですので、深耕を行い根域を15%以上確保しましょう。プラウ耕は作土層を深くする他に、防除の難しいクログワイ、オモダカなど多年生雑草の塊茎（イモ）を土壌表面に露出させ、厳寒期の低温や乾燥にさらしたり、深い層に埋没させることで密度を低下させる効果もあります。

2 種子の準備

自家更新は異品種混入やイネシンガレセンチュウ、馬鹿苗病などの恐れも高いので、採種ほ産の種子を用いましょう。また、購入種子でも扱う際は混米防止のため、資材の清掃やラベルの確認等をよく行いましょう。

3 害虫防除

厳寒期の耕耘は、スクミリンゴガイの密度低下も図れますので、発生ほ場ではロータリー耕の回転数を上げて低速で耕耘します。

◆ 麦類

播種・排水対策

平坦地でも播種の適期は12月上旬頃までですが、やむなく遅れる場合は播種量を増量して、莖数を確保します。発芽やその後の生育で湿害を受けないうよう、作溝して排水対策に努めましょう。

(鎌田 博人)

施設野菜

◆ 共通事項

重油価格は高値で推移しており、暖房経費の負担が大きくなっています。「小さな対策の積み重ね」が大きな節油効果となりますので、身近なところから万全の対策を実施しましょう。

◆ きゅうり

促成の摘心栽培では子～孫づる、つる下ろし栽培では主枝となる子づるの収穫期です。

ハウス内の温度管理は全作型で、午前26～28度、午後23～25度、夜間12～

14度を目標に管理します。

摘心栽培では採光・通風を良くするため、孫づるまでは規則的に摘心し、ひ孫以降は生長点を2～3本確保しながら、込み合った場所の枝を中心に整理し、追肥は10㎡当たり窒素成分で、月に5～6㎏をかん水時に施用します。

つる下ろし栽培でも着果が安定してきたら、午前中は空中湿度を確保するため、内張りビニルの開閉により湿度調節を行います。追肥は、摘心栽培と同様に行います。

◆ ピーマン

促成栽培は収穫とあわせフトコロ枝及び側枝の整理をおこないます。整枝法は、低位節から発生している徒長枝は根元から除去し、第3～4分枝のフトコロ枝は、収穫が終わったら1節を残し適宜切り戻します。第5分枝以降の側枝については2～3節で摘心を行います。

追肥は、2月までは月に10㎡当たり窒素成分で3～4㎏ずつ行います。ハウス内の温度は、午前26～28度、午後24～26度とし、夜間は18度とします。

◆ トマト

促成の丸トマト、ミニトマトともに収穫期です。追肥は、開花段ごとに10㎡当たり窒素成分で1㎏を目安に行います。ハウス内の温度は、午前26～28度、午後23～25度、夜間10度～12度とします。ミニトマトはこれより1～2度高めに管理します。

◆ いちご

頂花房の収穫と第1腋花房（2番果）の肥大期となります。着果負担も大きく、草勢が低下すると第2次腋花房（3番果）以降の収量、品質に影響するため、遅れないよう追肥を行います。追肥は、液肥を主体に、月に窒素成分で10㎡当たり2～3kgを目安としますが、低温期は吸水量、吸肥量ともに低下しますので、かん水、追肥ともに生育を見ながら控え気味に行います。ハウス内の温度は、午前25～28度、午後20～25度、夜間5～8度を目標に管理します。

（黒木正晶）

葉茎根菜類・いも類

◆ アスパラガス

地上部を刈り取る時期です。刈り取りは茎葉が完全に黄化した後が望ましく、おおむね下旬が適期になります。12月下旬から1月上旬にかけ、株は休眠から覚めて萌芽できる状態になるので、早出しをねらう場合は、中旬までに刈り取りを終えましょう。

◆ ごぼう

トンネル栽培は上旬には播種を終えましょう。発芽適温は20～25度で、30度以上では発芽率が低下しますので、高温になるときには換気が必要です。特にトンネルビニールが新品の場合は、高温になりやすいので注意しましょう。

◆ にら

促成栽培の収穫期です。無加温栽培では、過湿による白斑葉枯病の発生や凍害による葉先のヤケが心配されます。白斑葉枯病の予防的な防除を行い、発生源となる残渣をハウス外に持ち出すとともに、除湿保温に気を配りましょう。加温栽培では、最低夜温を5度に設定しますが、刈り取り後3～4日だけは10度に設定にすると、萌芽が早く丈夫な株になります。

◆ レタス

上旬頃にはトンネル被覆がができるように準備し、寒いときは被覆し、暖かい日は換気が必要になります。特に収穫直前の低温は腐敗病を助長するため、トンネル被覆が必要です。また、換気温度が高いと緩んだ縦長の形状になりやすく、寒いと締まった小玉になるため15度から20度を目標に管理します。不織布等のべた掛け資材をレタスにかぶせた上で、トンネルの裾を常時すかしておくことである程度の栽培は可能ですが、特に冷える夜はトンネルを閉めて低温被害が出ないようにすることが重要です。

(河野 健次郎)

果樹

1 常緑果樹

◆ 露地柑橘の害虫防除

今年は秋のハダニが非常に多く発生し、越冬虫数が増加するため翌年の発生が増加することが予想されます。必ず、マシン油乳剤を散布し、ハダニやカイガラムシの越冬虫数を減らしましょう。この剤は、虫が呼吸する気門を塞ぐことで殺虫するので、化学農薬に見られる効果の低下が見られません。枝や葉に十分な量を散布します。ただし、樹勢が弱った樹には冬の散布は避け、3月上旬頃に散布します。

◆ 完熟きんかん

1月中旬からは、完熟きんかんの収穫が始まります。果実肥大が十分に確保されている園では、昼間の温度は15度程度を目安に管理し、着色促進に向けて管理しましょう。肥大不足で、秋季高温管理を行っていた園では、昼温28度から、肥大を期待する場合は、20度へ、着色を進める場合は15度へ徐々に落としていきましょう。着色が進んできた園では高温と高湿度により、水ぐされ症や裂皮が発生しますので、早朝の換気により、施設内湿度を低く維持しましょう。

◆ マンゴー

今年は夏の日照不足のため、枝の充実が悪く、花芽の萌芽のばらつきや遅れが見られます。通常どおりに温度を上げると花芽が少なかったり花が咲いても着果が悪いなどの状況が懸念されます。平年よりもじっくりと温度を上げていく事で充実した花芽を作りましょう。

2 落葉果樹

◆ 元肥の施用

落葉果樹は、かんきつ類などの常緑果樹と違い、根の活動が始まるのは2月上旬頃と早い傾向にあります。このため、なし、くり、かきなどは年内に元肥を施用しましょう。

◆ くりの剪定

大玉多収生産のためには、剪定が非常に重要です。太さ8mm以上、長さ50cm以上の結果母枝を1㎡当たり5本程度になるように整理します。弱小枝はすべて除去しましょう。

3 果樹園共通

◆ 石灰の施用

土の酸性化は肥料の吸収や根の生育を阻害して、樹勢低下を招きます。土壌分析を行い、酸性の場合は石灰質資材で調整しましょう。

(山口 和典)

花き

◆ 花き全般

今年は10、11月の気温が高く推移し、12月についても気温が高くなり、日照時間が少ない予報が出されています。気象予報をチェックし、天候に応じたより細やかな栽培管理を心がけましょう。

◆ 電照ギク

「神馬」系統は10度以下の低温に遭遇すると開花遅延を起こす恐れがありますので、消灯までは夜間の温度を13度（実温）で管理する必要があります。消灯前の栽培期間中に低温に遭遇した場合は、消灯2週間前からの夜温15度で予備加温を行ってください。低温開花性品種「神馬66-4」は、消灯後は18時から1時までは15度、1時以降は12度の変温管理を行うと大幅には開花が遅れずに、暖房コストの削減が可能です。

◆ スイートピー

ほ場条件や品種によっては草勢にバラツキがありますので、それぞれの状態を考慮し、つる下げや腋芽の除去、葉面散布の活用によって草勢管理を行い、安定した出荷につなげましょう。また、花シミや灰色かび病発生リスクが高まりますので、微生物農薬の活用や暖房制御装置の効果的な活用で対策をとりましょう。

◆ デルフィニューム・エラータム系

収穫前から2番花の抽だいが始まっている株もありますので、出荷計画にあわせた温度・肥培管理を行ってください。1番花出荷終了後の夜温管理は、ロゼットを回避して1～2月に出荷を行う作型では抽だいまで15度、ロゼットを打破して3～4月に出荷を行う作型では一定期間低温でロゼットを打破した後、10～15度で加温を行ってください。さらに電照を行う必要もありますので、地域の農業改良普及センターに相談しましょう。

◆ ホオズキ

早い地域では1月から植え付けが始まります。定植前にはほ場の消毒や、親株の地下茎の堀上・調整など準備を始めてください。特に白絹病等の立ち枯れ性病やネコブセンチュウが発生したほ場は十分な土壌消毒を実施し、植え付ける地下茎の選別・消毒は十分に行ってください。

◆ ラナンキュラス

内ビニールの開閉をしっかり行い、昼間は換気を徹底して品質の向上に努めましょう。ハウス内の気温を下げ過ぎると生育が停滞し、収量があがらないので、15度程度を目標に温度管理を行いましょ。1番花の収穫が始まると草勢が低下するケースが見られますので、硝酸態チッソの割合の多い液肥を適宜施用して草勢の維持を図り、安定的な採花を行いましょ。

(中村 広)

畜産

◆ 家畜防疫対策

先月国内において野鳥から高病原性鳥インフルエンザ（H5N8亜型）ウイルスが検出されました。冬場は渡り鳥を含めた野鳥の本県への飛来も多くなります。養鶏業において鳥インフルエンザがひとたび発生すると、大きな打撃を被るばかりでなく、他の産業や普段の生活にも大きな影響を及ぼします。鶏舎や農場内の石灰消毒と、防鳥ネットの再点検を早急に行い、野鳥や野生動物の場内への侵入を防ぎましょう。農場内への出入り時には衣服を着替え、車両の消毒を行います。沢水や井戸水を利用している農場では、定期的に水質検査を実施し、塩素剤などで消毒しましょう。

◆ 家畜

寒さが本格化し、朝夕の気温が急激に低下する時期です。寒さや急激な温度変化は家畜の生産性を低下させるので、防寒対策をしっかりと行いましょう。幼畜は寒さに弱いので、隙間風が直接あたらないようカーテンやコンパネを設置するなどします。冬場は換気不足になりがちなので、床をこまめに清掃、床敷きを交換することでアンモニアガスなどの有毒ガスの発生を防ぎましょう。気温の上がる日中に畜舎カーテンを開け、換気扇やファンを回すなどこまめな換気を行いましょう。床が乾燥しすぎると、まいあがった埃や塵を家畜が吸い込み呼吸器疾患を発生しやすくなりますので、極細かな霧を噴霧するなど程度な湿度を保つようにすることも重要です。

◆ 飼料作物

冬場の牧草は、硝酸態窒素を比較的多く含むものがあります。特に青々しているものは要注意です。普及センターで事前に硝酸態窒素をチェックし、安全を確認した上で、家畜に給与するようにしてください。

(須崎 哲也)

特用作物

◆ 茶

1 越冬芽の凍害対策

気温の低下に伴い、越冬芽の耐凍性は徐々に高まりますが、急激な低温が予想される場合には、早生品種や中切り園での越冬芽凍害（芽つぶれ）の発生に注意してください。

防霜ファンやスプリンクラーを利用して防寒対策を実施する場合には、実際の気温とセンサーの温度差をチェックした上で設定温度を0度とし、越冬芽の耐凍性の獲得状況を確認しながら実施します。

2 カンザワハダニの防除

一番茶の収量、品質に対する影響が大きいカンザワハダニは、冬期でも産卵する個体が多いため、越冬前後の防除により密度を下げるのが重要です。

防除の際は、裾部や葉裏への薬剤の付着状況を確認しながら、防除暦に従って散布してください。

3 チャトゲコナジラミの発生の確認

県内の茶園でもチャトゲコナジラミの発生が確認されました。この害虫は、茶の葉の裏に寄生して越冬しますので、茶の葉の裏を確認し、見慣れない虫を発見した場合には、最寄りの農業改良普及センター等の茶関係機関へ連絡してください。

4 新・改植園の準備

茶園の有効土層は60％程度といわれていますが、茶の根は1m以上伸びることもありますので、来年の春に新・改植を予定しているほ場では、少なくとも60％、できれば

1m以上の深耕、天地返し等を実施し有効土層を確保します。また、土壌pHの改善や排水対策等も実施しておきましょう。

(佐藤邦彦)

◆ しいたけ

1 原木の玉切り

原木伐採後、1～2ヶ月程度の葉枯らし乾燥が済んだら玉切り作業を行います。玉切りの適期は、①若木では木口面に半径の3分の2程度、老齢木では樹皮近くまでひび割れが入ったとき②小枝を折り曲げるとササクレ状に折れるとき③小枝の内樹皮が褐色になるとき、とされています。

2 植菌

玉切り後は、害菌や害虫の侵入防止のため早めに植菌を行います。

種菌は、栽培条件や目的に合った品種を選定します。

植菌数は、種駒の場合末口直径（ ϕ ）の2倍以上とされ、植菌間隔は縦に長く、横に短くし、千鳥状に行います。樹皮に傷がある場合や枝の切り口がある場合は周囲に余分に植菌して、害菌の侵入を防ぎましょう。

（小田 三保）

◆ たばこ

今月も来年作に向けての準備が主な作業となります。

1 土壌病害（立枯病・疫病）の病原菌密度の低減と土壌消毒剤の効果促進を図るために、冬期耕耘を月に3回行いましょう。

2 ピクリン剤で全面消毒を実施する場合は、植付け3ヶ月迄となります。特に本年作でグレー葉が生出したほ地については、使用時期と使用量に十分に注意しましょう。

また、土壌消毒を実施する際には、農薬使用基準に沿って、薬害・公害の無い様、最大の注意をはらい使用しましょう。

3 肥料の分解を進め、初期生育を促進するため、施肥は早め（特に水田は12月中）に実施し、未熟堆肥の使用を避けましょう。

4 練り畦防止のため、土壌水分の良い時期に施肥畦立等を行いましょう。また、病害の耕種的防除と除塩対策のために、溝堀機等を用いて排水溝を完備しましょう。

（松元 貴光）

内容の詳細について

12月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県営農支援課及び森林経営課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病虫害の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

(<http://nogyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>)

向こう 1 か月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

農作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
施設果菜類	病害一般	—	暖房経費低減のため、ハウスを多層・多重被覆にしているところでは、施設内が多湿になりやすく病害の発生が助長されるので、換気や早朝加温など適切な温湿度管理に努めます。
冬春きゅうり	べと病	やや少	いずれの病害も多発してからは防除効果が低くなるので、予防に重点をおき、発生が見られたら初期防除を徹底します。 うどんこ病は乾燥時に多発するので、ほ場内が過乾燥にならないように管理します。 褐斑病は平年並の発生ですが、べと病やうどんこ病の発病後に激発することがあるので注意します。
	うどんこ病	並	
	褐斑病	並	
	黄化えそ病 (MYSV)	—	
	ミネキイロアザミウマ	やや少	
冬春ピーマン	病害虫全般 (改植時の留意点)	—	ウイルス病を媒介するコナジラミ類やミナミキイロアザミウマに対しては、前作のきゅうりを抜根する前の防除を徹底するとともに、抜根後は少なくとも20日間蒸し込みます。 また、前作に褐斑病などの発生があった場合には、後作きゅうりの定植後直ちに予防防除し、感染を防ぎます。
	斑点病	並	うどんこ病は、乾燥時に多発するので施設内が過乾燥にならないように注意します。一方、うどんこ病以外の病害は、多湿条件で発生しやすいので、ハウス内の温湿度管理、排水対策等を徹底します。 いずれの病害も、予防・初期防除を徹底し、罹病した枝葉は感染源となるので、発見したら直ちに除去し、ほ場外に持ち出します。 ミナミキイロアザミウマは10花当たりの寄生虫数が1頭から被害につながるかとされています。多発してからは防除効果が低くなるので、低密度のうちに防除を徹底します。また、有色粘着板を設置し、発生密度を抑制します。
	うどんこ病	並	
	ミネキイロアザミウマ	やや少	
	ヒラズハアザミウマ	やや多	
タバココナジラミ類	並		
冬春トマト	葉かび病	並	例年と比べ早い時期からうどんこ病の発生が見られます。うどんこ病は、乾燥時に多発するので施設内が過乾燥にならないように注意します。病勢が進展してからは防除効果が低いので、発病を確認したら早めに防除します。 トマト黄化葉巻病の発病株は伝染源になるので、必ず株全体を抜き取り土中に埋めるか、ビニル袋に入れて枯れるまで密閉します。本病を媒介するタバココナジラミ類の早期発見・防除に努めるとともに、施設内に黄色粘着トラップ等を設置し密度を抑制します。
	トマト黄化葉巻病 (TYLCV)	並	
	うどんこ病	やや多	
	タバココナジラミ類	並	
	ハメグリバエ類	やや少	
冬春いちご	うどんこ病※	やや多	うどんこ病の発生が多く防除情報を発表しています。予防に重点をおくとともに、罹病葉・果実は伝染源となるので速やかに除去します。炭疽病の発生は平年よりやや少ない状況ですが、発病した株は早期に除去し、新たな感染を防止します。 ハダニ類の発生が多くなっており、防除情報を発表しています。寄生数が増加してからの防除は難しくなるので、低密度時に防除を徹底します。なお、薬剤感受性が低下しやすいので同一系統薬剤の連用は避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を心掛けます。
	炭疽病	やや少	
	ハダニ類 ※	やや多	
	アブラムシ類	やや多	
かんきつ類 (露地栽培)	カハダニ ※	やや多	マシン油乳剤の散布は、薬剤感受性の低下には影響がなく、また、カイガラムシ類との同時防除が可能であるので、樹勢が弱っていないことを確認し防除します。
茶	カサワハダニ	やや多	冬季のマシン油乳剤の散布は薬剤感受性の低下に影響がないので効果的です。

- 1) ※は防除情報を発表しています。
- 2) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。
- 3) 病害虫防除・肥料検査センターのホームページアドレスは、<http://www.jpnp.ne.jp/miyazaki> です。